

平成十三年三月

蟹江町歴史民俗資料館

年報

第二十一冊

目次

一 「沿革誌」より	1
二 事業概要	2
三 資料の収集・保管	3
四 展 示	10
五 調査・研究	15
六 情報提供	17
七 教育普及	18
八 庶務報告	29
九 文化財保護	31

蟹江町歴史民俗資料館特別展

来て 見て



期間：平成11年11月6日（土）～12月5日（日）
午前9時～午後5時（最終日は午後1時まで）
月曜、祝日休館

場所：蟹江町産業文化会館 企画展示室・第1展示室
蟹江町大字今字蟹江浦23-4

主催：蟹江町生涯学習課

特別展開催にあたり

昭和40年代蟹江町史を編纂している時代に「蟹江」という地名の由来について、その昔、川の河口部にあたる葭山など湿地に多くの「カニ」が生息していたことに因んで付けられたことによると説明したならば、町民の方々は誰も疑問を持たなかったと思います。

当時の蟹江川周辺には「ジョウジョウマッカ」と親しまれた「アカテガニ」がいたところに生息し、夏などに子供たちが川遊びをする頃、カニと戯れた記憶を誰もが持っていたからで、それはある意味では当然のことだったかもしれません。

昭和34（1959）年の伊勢湾台風後、海拔0メートル地帯で高潮、洪水から先祖が築いた財産を守るために、名古屋防潮堤防が築かれることになりました。これはいわゆる「潮止め」で、今まで蟹江川に入っていた海水が再び入ることを防ぐというものであり、淡水と海水が交わる「汽水域」が消滅するということでもありました。

その後、蟹江川は淡水となり、汽水域に生息していた蟹江名産のヤマト蛸、鰻とともに、アカテガニも姿を消していきました。

現在、「蟹江」の地名の由来について、冒頭の説明を試みたら、昔にカニと戯れた体験のある人以外は、きっと疑問をもたれるのではないのでしょうか。

平成となり歴史民俗資料館では、蟹江町内の地名の由来について各地区に「字名の歴史由来看板」を設置してまいりました。各関連資料を紐解くとその中で人名と同じく地名にも、定かではありませんが何らかの由来のもとにあるものが存在すると推測されるということが解りました。

今回当館では、「蟹江」の由来のもとになる「蟹」について、自然、歴史、民俗、美術工芸など関連資料を収集し、展示することにより皆様に身近で親しみのある存在であることを理解していただくため、特別展示を企画いたしました。

特別展をとおして、「蟹」と「蟹江」について一層の愛着を持っていただきましたなら幸いに存じます。

なお、関係各位には今回特別展開催にあたり、同館の開催趣旨をご理解いただき、多大なるご尽力、ご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成11年11月 吉日

蟹江町歴史民俗資料館

1 蟹の生態について

蟹は分類学上では昆虫などと同じ節足動物の仲間に含まれます。節足動物は、昆虫、蜘蛛など陸上に生息するものを含めると約100万種以上いるといわれています。

蟹が属する節足動物の甲殻類は、約4万種もいる大きなグループで、ミジンコのような目に見えない小さなプランクトンから脚を広げると3メートル以上になるタカアシガニ（日本伊豆地方に生息）など様々な生物が含まれます。

特に甲殻類で代表的なものに、カニ、エビ、ヤドカリがあげられますが、カニ類は世界中で約5000種が知られており、その内日本には約800から1000種が生息しています。

代表的なカニには、サワガニ、モクズガニ、アカテガニ、ワタリガニ、ズワニガニなどがあげられますが、一見カニの形によく似たタラバガニ、花咲ガニなどは”カニではないカニ”で、種的にはヤドカリの仲間とされています。

（以上 碧南海浜水族館「カニ」展、展示解説参考）

2 蟹の地名について

カニが地名に付けられている所は、今回の調査によると全国に約50ヶ所程度あることが判明しました。（これはあくまでも日本地図及び郵便番号帳などによって確認できた箇所であり、これに記載されていないものは除きます）

北は北海道根室沖のカニ岩から熊本県人吉市までその分布の範囲は広範です。特に関東から東海、近畿地方にかけて多くのカニ地名が存在しています。そしていずれも「カニ」は水に関係があるようです。渓谷の沢、大きな川の付近、河口部、沿岸部にすべて「カニ」の地名は隣接していることが解りました。

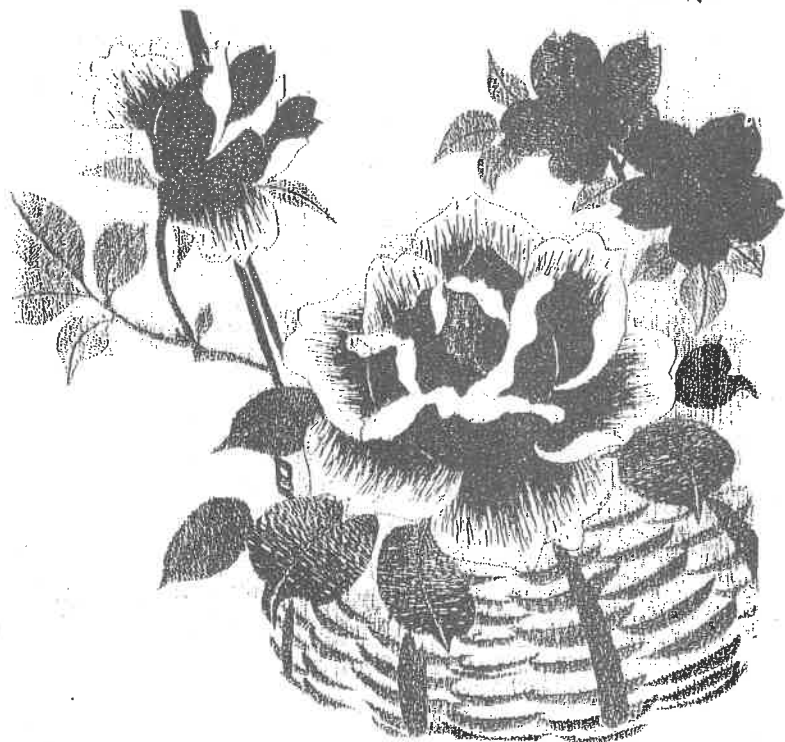
しかし、これは今回の短期調査の結果ですので今後とも調査が必要だと思われます。

（以上 当館作成 日本全国”蟹”マップから）

蟹江町歴史民俗資料館特別展

蟹江の刺繍

～20世紀を彩った刺繍産業～



期間：平成12年1月16日（日）～2月13日（日）

午前9時～午後5時

月曜・祝日休館

場所：蟹江町産業文化会館 企画展示室

主催：蟹江町生涯学習課

特別展開催にあたり

糸のあやとり

蟹江の刺繍

まねて出来ない 美しさ

これは元蟹江町長の藤田鎌吉氏（在任昭和11～20年）が作ったという民謡の一節です。

かつて蟹江町を始めとする尾張南部地方は、日本刺繍の加工業が盛んな地域で、日本刺繍の3大産地の一つに数えられるほどでした。

この地方の刺繍は、今から約100年前の明治30年代以降、特に発展し、全盛をきわめてきました。蟹江町内には当時「ハンカチ屋」と呼ばれる刺繍屋が数十件もあり、多くの人達が刺繍業に関わりをもっていました。

しかし、伊勢湾台風襲来の打撃と生活の変化により、縮小傾向が進み、現在では蟹江町内に残る刺繍業者は1件のみ、周辺の刺繍業者も数件残っているだけとなってしまいました。

刺繍屋が「ハンカチ屋」と呼ばれていた時代を知る方々も数少なくなりつつある今、関連資料を展示公開し、この20世紀を彩ってきた刺繍というものを、改めて認識していただきたいと存じます。

展示資料をとおして、刺繍の技術の素晴らしさとともに、産業としてもいかに活気あるものだったかということも感じていただければ幸いに存じます。

付け加えさせていただくと、実際、展示にあたり、大変多くの方にご協力をいただいたのですが、当時のことを語ってくれた方々の目は、いきいきとして、言葉よりもその様子を語ってくれていたように感じました。

そして、今回の特別展開催のために蟹江町内に残る唯一の刺繍業者である加藤一男氏をはじめ、多大なるご協力をいただいた方々に、ここに厚く御礼を申し上げます。

平成12年1月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

1 産業としての刺繍のはじまり

蟹江町を中心とした地域で刺繍業が盛んになったことのおこりは、明治時代にさかのぼります。

明治の初めの頃、富田村千音寺で刺繍業を営む水野徳右衛門（当時3代目）という人が、西之森の猪飼末次郎氏や烏森の石黒吉次郎氏など、12人の弟子を養成していました。その後それぞれの弟子たちが独立してゆき、明治20年頃猪飼松次郎氏も開業し、そこからさらに蟹江に刺繍が広まっていったのです。また、独学で刺繍を学び、開業する者や京都や横浜で修行をして開業する人もいました。

もともとは仏具商の下請けとして打敷や袷袋などの加工をしていたのですが、当時七宝村の七宝焼が海外に輸出されていたことの影響を受けて海外向け製品を扱う「貿易刺繍」を手がける業者が多く、その主な加工品がスカラと言う縁取りを施したハンカチだったので、この地方の刺繍屋は、「ハンカチ屋」と呼ばれていたということです。



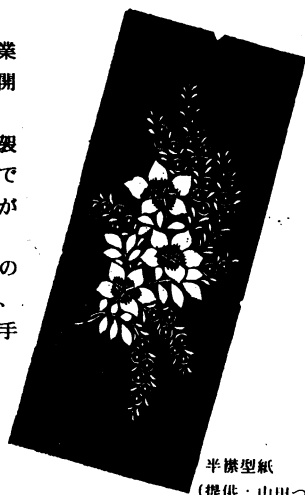
明治40年頃
蟹江本町にて
(提供：猪飼松重様)

2 半襟の流行

明治末になると、一時海外向けの製品が落ち込み、廃業しなければならぬ業者もでてきたといえます。その打開策として半襟の生産がはじまりました。

もともとこの地方の国内向けの製品といえば、打敷や袷袋などの仏具が主で、半襟などの和装用品は京都が本場でした。しかし、ある業者が半襟の生産を試み、始めたのがきっかけで、半襟の生産が広まりました。

刺繍の半襟は、嫁入り衣装用のものをはじめ、正装用のものが昭和の初めまで大流行し、当時の主流製品となり、京都からの注文をうけ、内地向け（国内向け）の製品を手がける業者もその後多くなりました。



半襟型紙
(提供：山田つや子様)